都市のリスクマネジメント

第199回

台湾巡検～スコップヒーローと落石珈琲～

跡見学園女子大学教授
鍵屋 一





2026年9月20日、花蓮県キリスト教会。スコップヒーローが残したスコップで作られたクリスマスツリー

9月のシルバーウイーク、台湾の防災を学ぶため、室崎益輝先生らの巡検に同行させていただいた。台湾は、日本やアメリカの良いところを学び、継続的に改良を行う進取の精神に富んでいた。その中で、特に印象深かった二つの活動を紹介したい。

スコップヒーローと、それを支えた人々

2025年9月23日、台湾・花蓮県の光復郷を、大量の土砂を含む洪水が襲った。台風による豪雨で馬太鞍渓上流の土砂ダム湖から水があふれ、下流の橋を押し流し、住宅や商店に押し寄せたのである。後の報道では19人が死亡、5人が行方不明となり、約1600戸で泥の撤去が必要になった。水が引いた後にも、地域を埋め尽くす厚い泥が残された。

そこへ、長靴を履き、スコップを担いだ人々が台湾各地から集まった。学生、会社員、休暇を使った人々。誰かの家を取り戻すために汗を流す姿は、現地では「鏟子超人」、日本語でいえば「スコップヒーロー」と呼ばれた。9月27～29日の3連休だけで、光復駅で降りた人は延べ6万人を超えた。これは参加者の実人数を数えた統計ではないが、支援の大きな波を物語っている。

ヒーローの仕事は、一すくいずつ泥を運び出すことだった。重機が入れない住宅の中で泥をかき出し、水に漬かった家具を搬出する。泥まみれになりながら、見知らぬヒーロー同士が力を合わせる。このとき、どの家で泥出しが必要か、どこで既にヒーローが活動しているか、まだヒーローが入っていないところはどこかが、毎日スマートフォンに表示され、それを見て新しいヒーローが自律的に活動したという。

そのヒーローたちを、多くの人々が支えた。台湾鉄路は列車を増発し、光復駅への停車を増やした。帰りには、切符を買う長い列に並ばず、先に乗車して後で精算できるようにした。疲れた人を少しでも早く帰すための工夫だった。

現地へ行けない金物店の店主は、支援に向かう人へ工具を無償で渡した。慈済基金会は清掃道具や防水靴を用意し、活動を終えた人は駅前にスコップや長靴を残して、次の人へ託した。駅の周辺では行動厨房（移動式の炊



2026年9月20日、花蓮県「鏟子超人館」。スコップヒーローの活動写真、スコップ、長靴など

き出し）が温かい食事を作り、飲食店が料理を届け、おばあさんがちまきを配った。支援を受けた住民も、帰るボランティアの長靴を洗って感謝を伝えた。

発災から10日目の10月2日には、被害の大きい7村で住宅の泥出しが88％まで進んだ。その後、作業は道路や側溝の清掃、水道・電気の修復へ移り、10月中旬には清淤（泥・土砂の除去）作業も終盤を迎えた。活動が一斉に終わったわけではない。スコップで切り開いた暮らしへの道を、専門職や継続支援の人々が引き継いだのである。ヒーローの力は、それぞれのできることを持ち寄る社会の力でもあった。

落石珈琲――楽しさが育てる地域防災

台湾・雲林県古坑郷華山村には、コーヒーの香りとともに育つ防災活動がある。国の自主防災モデル事業に取り上げられたこの村は、土石流の危険を抱え、豪雨時には住民の早めの避難が欠かせない。そこで自主防災会は、村の特産品であるコーヒー豆を生かし、防災を地域の暮らしや産業と結び付けている。



2026年9月22日、落石珈琲が自主防災活動資金になっている説明図


2026年9月22日、落石珈琲作りセット。うちわにまでロゴをデザイン

私たちが訪問した際にも、自主防災活動の報告に続いて、コーヒー豆のばい煎を体験させてもらった。生豆やフライパンなどは、既に準備されている。ガスコンロに火を付け、豆をいる。焦がさないように気を配りながら、フライパンを動かす。普段は飲むばかりのコーヒーが、少しずつ自分の手で出来上がっていく。

ばい煎した豆は、熱いうちにうちわで強くあおぎ、薄皮を飛ばす。ここはのんびりしていられない。皆で懸命にあおぐ作業も楽しく、自然に笑いが出てくる。最後に豆をひき、袋に詰める。難しいところでは自主防災会の方々が手を貸してくださり、全員が無事に、自分で作ったコーヒーパックを手にした。

このコーヒーには、愉快な命名の逸話がある。訪問時に伺ったところ、当初、役所からは「防災珈琲」という名前を提案されたそうだ。しかし、自主防災会の人々は、そんなつまらない名前は嫌だと断り、「落石珈琲」と名付けたという。なんとおしゃれな名前だろう。村が向き合う災害を、思わず手に取りたくなる商品の名前にしてしまう。その発想と遊び心に、すっかり感心した。

体験場所の横では、地元の方がばい煎したコーヒーが販売されていた。楽しい体験の後には、お土産にも買いたくなる。そして、その収益の一部が自主防災活動を支える仕組みになっている。私たちへの説明では、そろいのジャンパーを用意したり、イベント費用にしたりするなど、活動の自主財源として活用しているとのことだった。自分たちの商品で資金を生み、自分たちの活動を育てていく。

さらに、私たちのような視察客を受け入れることが、村のにぎわいにもつながる。訪れた人は防災を学び、コーヒー作りを楽しみ、村の人々と親しくなる。買って帰ったコーヒーを飲むたびに、華山村の笑顔と、防災への工夫を思い出すだろう。

コーヒーと防災。一見、縁遠い二つが結び付き、人の交流、活動資金、地域経済を一緒に育てている。災害への備えを、楽しく、続けたくなる営みにする。落石珈琲は、地域防災を日々の暮らしの中に根付かせる、香り豊かな知恵だと感銘を受けた。

筆者プロフィール

鍵屋　一（かぎやはじめ）

1956年秋田県男鹿市生まれ。早稲田大学法学部卒業。板橋区防災課長、板橋福祉事務所長、福祉部長、危機管理担当部長（兼務）、議会事務局長等を経て2015年3月退職。京都大学博士（情報学）。2015年4月跡見学園女子大学観光コミュニティ学部教授。法政大学大学院・名古屋大学大学院兼任講師。内閣府地域活性化伝道師、（一社）福祉防災コミュニティ協会代表理事、被災者支援のあり方検討会座長、個別避難計画モデル事業アドバイザリーボード座長など。著書に『図解よくわかる自治体の地域防災・危機管理のしくみ』『ひな型で作る福祉防災計画』など